

一般部門

訪看さん

こまえ
【小前 ひろみ・東京都】



入選

「ほうかん」と聞いて最初に訪問看護師さんが頭に浮かぶ方がどのくらいいるでしょう。私は落語などで知っている「幫間」が浮かんでしまいます。母が胃ろうを造設した時まで、その存在すら知りませんでした。ケアマネさんがケアチームに訪看さんを入れて下さっても、実際は何をやっていたのか分からないでいました。

認知症がかなり進んだ母の胃ろうでの在宅介護が始まった時、訪看さんがしてくださる胃ろう部の手当てや、血圧などの体調把握などは想像がつく内容でしたが、「てきべん摘便」には驚きました。まだ多少言葉を話せた母が嫌がるのを聞いておられず、その場を離れてしまったほどです。でも、すぐに状況は変わってきました。

便秘症ではなかった母も腹筋が弱り、廃用症候群でお通じが出せなくなってきた、摘便は必須となりました。週1回の訪看さんでは足りず、私が見よう見まねでやるようになって、彼女たちの持つ技術のすごさをじかに感じる事となりました。しっかりと大腸の上の方から下ろしてきて気持ち良く出させる。そして陰部洗浄も速やかに清潔に終える(自分だと水浸しになります)。

その手腕はプロの手技そのものだと感じました。もちろん、摘便以外にも、彼女たちの経験に裏付けられた知識で、お医者さまに相談するにはささいな、でも切実な症状などに適切なアドバイスをいただきました。

病状が進むにつれ、容態が思わしくない時や吐くなどの急変時、相談に乗っていただくことが多くなりました。時間をいとわず訪問し、病状への不安と介護に疲れた家族の状況を察して、言葉を選んでアドバイスしてくれる。そういった心のケアとも言えるべきことが、彼女たちの真骨頂でした。

条件の整った病院と違って、たった1人で患者や家族に臨機応変に対応する。技術的にも精神的にも、大変なことだと思います。彼女たちの手厚いバックアップが在宅介護の大きな味方でした。介護を終えた今、しみじみと訪問看護師さんに感謝いたします。